未知なる世界を求めて——『虹』

奥村　透

『虹』(*The Rainbow*, 1915) は、一九一二年の終りに『息子と恋人』が完成してほとんど時をおかずに、『姉妹』(*The Sisters*) という題名で書きはじめられた作品から生まれたものである。『姉妹』がのちに二部に分れ、前半は『結婚指輪』(*The Wedding Ring*) という題名を経て『虹』になり、後半はのちに『恋する女たち』(*Women in Love*, 1920) に発展した。したがって、ロレンスが『虹』の決定稿の末尾に "End of Volume I" と書きつけ、『恋する女たち』を "something of a sequel to *The Rainbow*" と呼んだことでも明らかなように、これら二篇は二部作的性格を持つものであり、緊密な関連において考えられねばならない。すなわち、『虹』の主題はそのまま『恋する女たち』へ発展していくものなのである。

ところで『虹』は、『姉妹』として書きはじめられ一九一五年春に完成をみるまで、少なくとも八回は書きあらためられており、内容もすこし変ってきているようである。しかし、終始変らぬ点がひとつある。それはロレンスが主としてエドワード・ガーネット (Edward Garnett) あての一連の書簡で、この作品を前作『息子と恋人』とはまったく異なった新しい手法で書くと、くりかえし述べている点である。それは一言でいえば、従来の

小説に伝統的な個性的・道徳的なキャラクタを描くことではなく、すべてのキャラクタの下にひそむ人間の「非個性的意志」(“the inhuman will”)を追求することにあったのである。すなわち彼の問題とするのは、「女が個性的な考えにしたがって如何に感じるかということではなく、女がひとつの現象として(いいかえれば、なにかより大きな、非個性的意志を表わすものとして)如何なるものであるか[1]」ということにあったのである。ロレンスはガーネットにつぎのように述べている。「あなたは私の小説に性格の古い固定的自我を求めてはいけません。別な自我があるのです。そしてその自我の行動によっては個性は認められず、いわばいくつかの同素的状態を通過するのです。そしてその同素的状態は、それを認識するには我々が用いなれているより深い感覚が必要なのですが、同じひとつの本質的には変らない要素から出たものなのです。(ちょうどダイアモンドも石炭も、おなじ純粋でひとつの炭素という元素であるのと同じです。ふつうの小説はダイアモンドの歴史を探ろうとするでしょうが、私はこういうでしょう。『ダイアモンドだって。なんだ。炭素にすぎんじゃないか』と。だから私のダイアモンドは石炭かすすかもしれませんが、私の主題は炭素なのです。)」(“You mustn't look in my novel for the old stable *ego* of the character. There is another *ego*, according to whose action the individual is unrecognisable, and passes through, as it were, allotropic states which it needs a deeper sense than any we've been used to exercise, to discover ;re states of the same single radically unchanged element. (Like as diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond—but I say, 'Diamond, what! This is carbon.' And my diamond might be coal or soot, and my theme is carbon.)”[1]) つまりロレンスの関心は、炭素、すなわち人間の character ではなく being を追求することにあったので、この点は彼じしん「やや未来主義的」といい、「ひじょうに新しく、小説において誰がやったよりもひとつ層が深い」と自負しているように、『息子と恋人』

をはじめ従来の伝統的小説の性格と大きく異なって、『虹』を革新的な小説たらしめている所因である。こうした彼の芸術観・創作態度のいちじるしい変化は、彼じしんが書簡のなかでしばしば述べているように、母の死後妻フリーダとの結婚生活によって、彼じしんが大きく変貌したことを示すものである。

さて『虹』は親・子・孫三世代にまたがる“a family-chronicle novel”の形をとっているが、ある家系の歴史をえがくいわゆる“a family-chronicle novel”ではない。作者の意図は、一家系の三代にわたる歴史というようなパーソナルな問題ではなく、もっと広い人類の生きていく姿、あるいは人間が真の意味で生きるとはいかなることかといったイムパーソナルな問題の追求にあったのである。すなわち、中部イングランドに住むブラングェン（Brangwen）家という農家の三世代の生きかたをとおして、この地上に永遠につづけられる人間の生のいとなみと、社会の変貌にともなう人間の生の意識の変遷を描こうという、雄大な構想をもったものなのである。この点を明確に認識すれば、この小説が前半は“a family-chronicle novel”の形をとっているのに、後半はまったく性格を変えてしまうのは、構成の欠陥を示すものだというようなムーア（H. T. Moore）氏の批評(2)は生まれぬはずである。

この小説の主筋は十九世紀の半ばごろから始まるのであるが、このノッティンガムシャとダービシャの県境にちかいマーシュ（Marsh）農場では、そのずっと前から何世代もにわたって、自然の規則ただしい循環と、そのリズムに溶けこんで生きている農夫の生活がくりかえされている。

They felt the rush of the sap in spring, they knew the wave which cannot halt, but every year throws forward

the seed to begetting, and falling back, leaves the young-born on the earth. They knew the intercourse between heaven and earth, sunshine drawn into the breast and bowels, the rain sucked up in the daytime, nakedness that comes under the wind in autumn, showing the birds' nests no longer worth hiding. Their life and interrelations were such; feeling the pulse and body of the soil, that opened to their furrow for the grain, and became smooth and supple after their ploughing, and clung to their feet with a weight that pulled like desire, lying hard and unresponsive when the crops were to be shorn away.(8)

彼らは春にはほとばしる生気の流れを感じた。とどまることなく、年ごとに生めよ殖えよとばかり種子をまき、やがて退くときには、嬰児を地上にのこしていく生命の波を知っていた。彼らは天と地の交わりを知っていた。日光が大地の胸や腸に吸いこまれ、雨が日中空たかく吸いあげられ、秋には裸かの自然が風にさらされ、もはやかくすに値いせぬ鳥の巣をさらけ出すことを知っていた。これが彼らの生活であり、自然との交わりであった。すなわち、胸をひらいて彼らが種子をまくためのうね溝となり、鋤いたあとは滑らかにしなやかになり、欲情のようにずっしりとひっぱる重みで足にくっつき、穀物の刈りとられたあとはふたたび冷たく答えもなくよこたわる大地。その大地の鼓動と肉体を感じながら暮すのであった。

ここには、宇宙の存するかぎり永遠につづく自然の循環のリズムと、それに呼応してこれまた果てしなくくりかえされる人間の生のいとなみが示されている。

ところでブラングェン家の男たちは、豊かな自然とのこうした“blood-intimacy”のみに満足して生きているが、女たちはたえず別の世界に眼をむけていた。彼女らは自分たちの住む農場のはるか彼方にあるものに憧れ、未知なる世界を発見しようと望んでいた。それは現実生活をこえて、さらに高い理想の生きかたを求めるもので

あった。この未知なる世界への人間のかぎりない探求こそこの小説の主題であり、ブラングェン家の三世代の生きかたに代表されて示されるのである。この探求は三世代によってつぎつぎくりかえされるのであるが、同時に世代ごとに新しくやり直されるのでもあって、けっして同じことの反覆ではない。すなわちリーヴィス（F. R. Leavis）教授のいう「連続であると同時に不連続であるという逆説」[4]がみられる。未知なる世界への探求という点は一貫しているが、その様相は社会状勢の変遷を背景として、世代ごとに異なっている。すなわち、十九世紀半ばから二十世紀初頭にかけて古い社会体制がくずれ、機械文明の急激な進展とともに、社会が変化し複雑化するにつれて、未知なる世界探求の意識もより鋭く、あたらしいものになっていく。特にその相異は、第一・第二の世代と第三のアーシュラ（Ursula Brangwen）の世代とのあいだにおいて著しい。このことは、彼女の生きる世界がその父母・祖父母の生きた世界とは比べものにならぬほど近代化し、複雑化していることを示すものである。私はこの作品の主題を、人間の未知なる世界をもとめる遍歴の、三つのひろがる輪と考えたい。この輪は世代ごとにひろがっていき、目的である虹へ一歩一歩近づいていくのである。しかしこの小説の終りでも虹はかなたに望まれるだけで、辿りつけてはいない。人間が虹に達するにはあと何世代を要するのであろうか。いやそれは永久に到りえぬものであるにもかかわらず、人間のそれを求める旅は果てしなくつづけられていくのかもしれない。

ではロレンスが好んでいう未知なる世界を求めるとか、無限なる存在に触れるというのは何を意味するのであろうか。それは一口でいえば、人間がこの世にうけた生命の神秘を感得し、真に人間らしく生きること、すなわちこれもロレンス好みの表現でいえば、生の充足（“fulfilment”）を得ることであるといえよう。このばあい彼の考える人間とはあくまで個人であって、個人の集合体である社会ではない。彼にとって最も大切な問題は、如

何にして個人が真の意味での個人になりきり、真の意味の生を生きぬくかにあったのであり、社会は個人との対立において考えられるべきであった。すなわち個人が社会にたいして如何なる関係をうちたてていくか、個人をしばる社会の慣習や制約のなかで、如何に個人を確立していくかこそ、最も重要な問題であった。リーヴィス教授のいうように、「個人が充足に達しうるのは、他者との最も微妙かつ複雑な対応関係によってのみであり」[5]、また逆に「充足を得た個人、すなわち真に個人であって他者との隔りや違いを認識し、その責任をとる個人同志のあいだでなければ、永続的で満足すべき人間関係はありえない」[5]からである。

そしてこの個人の対社会関係のうち、ロレンスにとって当面最も重要なのが男女の関係であった。彼は書簡のなかで、「けっきょく、男女間に新しい関係を確立すること、古い関係を調整することこそ今日の問題です」[6]といい、また「なぜならすべての生活や知識の源は男と女にあり、すべての生活の源はこれら二つ、すなわち男の生活と女の生活、男の知識と女の知識、男の存在と女の存在の交わりとまじりあいにあるからです」[7]と述べている。これはフリーダとの愛憎の葛藤を経て到達した結論にほかならない。『虹』を読むと、そこに登場する三世代の男女がそれぞれたがいに夫を、妻を、社会の一員として、自己との対立においてみていることが明らかである。夫婦は他人同志であるが、たがいにその違いを認め、そのあいだに適切な関係をうちたてる時には、たがいに未知なる世界を探る門戸となるというのがロレンスの考えかたである。つまり男女が正しい関係において結ばれることは、そのまま未知なる世界への探求に通ずるのである。かくて、この作品では三世代の男女関係が中心となっているが、それ自体が目的ではなく、究極の意図は、それを通じて人間の未知なる世界への探求を洞察することにあったことを見のがしてはならない。マリ（J. M. Murry）がこの作品の男女の葛藤にのみ注目し、これをロレンスの“sexual failure”の物語と片附けてしまっているのは[8]、作者の意図を見あやまっているといわ

ねばならない。この作品はパーソナルな恋愛物語でもなければ、性の世界の探求でもない。新しい人間の生きかたを追求しようとする、もっと大きな、「宗教的」衝動に発するものなのである。同時にこの作品は、先述したとおり、十九世紀半ばから今世紀の初めにかけて、物質文明の害悪に侵されつつある英国の社会状勢を背景とすることによって、ロレンスの透徹した文明批評を示すものでもあることを見のがしてはならない。この事は、第三の世代において特に顕著である。私は先にこの作品における三世代の生きかたを、しだいにひろがる三つの輪にたとえたのであるが、つぎにそれぞれの輪について見ていきたい。

まず第一の世代は、父のあとをついでマーシュ農場を経営しているトム（Tom Brangwen）と、その妻でポーランドうまれのリディア（Lydia）である。この関係は、妻が夫より年長の再婚者で、生国・階級を異にする点で、ロレンスじしんとフリーダのそれと似ている。時代は一八四〇年ごろ中部イングランドのこのあたりに、あたらしく開かれた炭坑をむすぶ水路が完成され、やがて鉄道の敷設とともに田園に鉱滓の匂いがただよい、ちかづく汽笛が機械文明の接近を感じさせるころで、自然のみを相手としていた農夫たちも、しだいに外の世界に眼をひらかれつつある。トムは十九歳のとき娼婦によってはじめて女を知るが、はげしい幻滅を感じる。それは、ほかの農夫たち同様、彼が母をはじめ女を自分の存在の拠りどころとして崇拝し、「宗教と愛と道徳を意味するあのかなたの世界の象徴」とみなしていたからである。かくて、その後彼は性の欲望になやまされながら、神聖視する女を欲望解消の道具とすることに耐えられず、自分の真にもとめる女が見つからぬままに苦しむ。彼はしだいに現実生活をいとい、外の世界にあこがれ、自分を解放してくれる手がかりを摑もうともがく。つまり、現実の農場の生活では彼は「充足」を得ていないのであって、真の生を生きるためには、現実の拘束をやぶって、

未知なる世界に解放されねばならなかったのである。

やがて二十八歳のとき、彼はノッティンガムから馬車をひいて帰る途中ひとりの黒ずくめの女に出あい、「あの女だ」と無意識にさけぶ。彼女はリディア・レンスキ（Lydia Lensky）というポーランドうまれの女で、祖国解放の動乱のさい、軍医で愛国運動に狂奔している夫とともに英国に亡命したのだが、夫が失意のうちに死んだあと、アナ（Anna）という娘とふたり暮している。トムは彼女に会って、今まで空虚であった自分があたらしくリアルなものに生まれかわったように感じ、異国人としての彼女の背後にある未知なものに不安をいだきつつも求婚し、彼女も受けいれる。ここに作者がリディアという異国人を導入したことには、それなりの理由がある。すなわち二つの異なった人種の血がまじるということのほかに、まったく異なった過去をもった二人がむすばれることはたがいに未知なるものへの探求であり、過去からあたらしい世界への生まれかわりを意味するのである。リディアと結ばれることがトムにとってあたらしい世界への生まれかわりであったと同様、リディアにとってもトムと結ばれることは、狂おしいまでの夫の祖国解放運動にひきずりまわされた、暗い過去からのよみがえりにほかならなかったのである。のちにトムが洪水で溺死したあと彼女は二度の結婚生活を回想し、前夫レンスキとのそれにおいては、自分は主義のためひとり悪戦苦斗して死んでいった夫の奴隷であり、影にすぎなかったのにたいし、トムとのそれにおいては個人としての存在をみとめられ、真の自分になることができたと考える。そして若妻を奴隷のように意のままに支配しながら、個人として理解せず、けっきょく真の意味で生きなかった前夫をあわれむのである。

このように、トムとリディアの結びつきは両者にとって運命的なものであったのだが、現実の結婚生活はかならずしも順調ではなかった。ともに肉体的には満足をえても、つねに背後に不安があり、不調和があった。それ

は二人の過去の相異からくる不安であり、不調和であった。トムにはたえずリディアの背後につきまとう未知の世界にたいする不安があり、彼女は暗い過去からよみがえろうとする意欲と、それをひきもどす暗い虚無感のあいだを行きつもどりつしていた。トムによって自分がよみがえりつつあることを感じて閉ざしていた殻をひらくが、彼のほうでは不安からすぐに応じることができない。そこで彼女はふたたび殻を閉ざしてよそよそしい態度にかえってしまう。存在を無視された彼は焦れて、摑みかかって自分をみとめさせたい衝動に駆られる。こうして、肉体的合一の歓喜と耐えられぬ乖離感（“foreignness”）とが、反覆する波のように二人を襲う。彼女のよそよそしい態度は、姙娠の月日がすすむにつれてますます著しくなる。しかしトムは狂おしいほどに焦れても、彼女に圧力をくわえてむりに自分に従わせることはしなかった。彼女をむりに過去からひきだして、自分と一致させようとすることは、二人の関係の破滅であることをわきまえ、彼女を自由にしておかねばならぬことを知っていたからである。すなわちここには、相手に自己の意志をおしつけて服従させようとする自我の闘いはみられず、その点つぎの世代のアナとウイリアム（William）の関係と大きく異なっている。マリ、リーヴィスなどおおくの批評家が、この第一の世代の関係を三世代の男女関係中最も成功であるというのは、他者の自我をみとめたうえでの調和という、この点を根拠としているからである。しかしいちおう調和は保たれたにせよ、二人の関係を霊肉両面における完全な成功であったとみなすことはできない。トムはリディアを失なうことをおそれて、彼女に自我をおしつけるのを控えたかわり、酒にふけり、つれ子のアナに愛情の充足をもとめるようになるのであって、これは二人の関係が完全な充足でなかったことを示すものといえよう。最後に彼らは結婚後二年を経たある偶然的な肉体関係において、これまでになかった完全な充足を得、たがいに新しい世界を発見したと感じ、以後その結合に満足してもはやたがいの過去など気にしなくなり、調和ある完全な関係を確立したということに

されている。しかし、それまでずっと不調和になやんでいた二人が、どうして急にこのような完全な充足に達しえたのか、その経過はきわめて唐突かつ不自然で、説得性を欠いている。精神面の不調和がそう簡単に解決されえたとは考えられず、けっきょく肉体の満足に没入することによって、その不調和を意識から抹殺しようとしたと解釈するほかはない。のちに愛していたアナがしだいに成長し、恋人を得て独立していくのを見まもるトムのみたされぬ孤独と苦渋や、結婚以来自分が人間としてまだすこしも「出来あがって」（“established”）いないという反省などは、彼が完全な充足を得ていなかったこと、未知なる世界にははるか及ばぬ境地にとどまっていたことを示すものといえよう。けっきょく、未知なる世界の探求という点では、第一の世代は最も初歩的で無意識的であり、その存在をおぼろに感じながら探求を意識するにいたらず、肉体による“a strong, dark bond”に満足しておわるのである。その意味で、リーヴィス教授が第一の世代の結婚生活はいちおう成功であったが、未知なる世界の探求にはおよばぬ「ごく限られたもの」であった[9]としているのは正しい。

世代はつぎのアナとウイリアムに移る。思春期に達したアナは、学校への失望、社会への不適合、家庭の空気にたいする反感などから現実生活をいとい、自由な世界にあこがれている。そうした彼女十八歳のとき、従兄（トムの兄アルフレッドの息子）のウイリアムが訪ねてくる。彼女はたちまち彼に惹かれ、「彼によって自分が解放され」、「彼は壁にあけられた穴で、そのかなたに外の世界が日の光に照りかがやいている」ように感じる。前の世代においてそうであったように、この二人の結びつきも、彼らをあたらしい世界へよみがえらせる運命的なものであったのである。彫刻にたくみなウイルが不死鳥をかたどったバタ・スタンパを彼女に贈り、そのスタンプをおされたバタの置いてあるバタ製造場で二人が抱きあうのは、象徴的意味をもつものと思われる。また二人ははじめて会った日いっしょに教会にいくが、のちに述べるように、教会は彼らの関係に重要な意味をもって

いる。さらにある雨の夜、トムは二人が納屋の屋根裏部屋で抱きあっているのを垣間みて、妻のリディアが彼の長男を生んだとき、泣きむずかる幼いアナを抱いて、やはり雨のなかをこの納屋に来たことを感慨をもって回想するが、これは世代の交代と、人間の生のいとなみのくりかえしを示すものにほかならない。かくて、二人は皆のあたたかい祝福と牧歌的な雰囲気のうちに式をあげ、新婚生活に入る。そしてともに過去のむなしい生活から解放され、あたらしい世界に生まれかわったような歓喜を経験する。

Suddenly, like a chestnut falling out of a burr, he was shed naked and glistening on to a soft, fecund earth, leaving behind him the hard rind of worldly knowledge and experience. He heard it in the huckster's cries, the noise of carts, the calling of children. And it was all like the hard, shed rind, discarded. Inside, in the softness and stillness of the room, was the naked kernel, that palpitated in silent activity, absorbed in reality.(10)

突然、いがから落ちた栗の実のように、彼は裸かでかがやかしく、やわらかで豊かな大地のうえへ脱ぎすてられ、その背後には世俗的知識や経験というかたい殻がのこされていた。彼はそれを行商人の呼び声や馬車の騒音、子供のさけび声にきいた。そしてそれはすべて脱ぎさられ、うちすてられた固い殻のようであった。内には、この部屋のやわらいだ静寂のなかには、裸かの核があり、それは真実の生に没入して、無言の活動におののいていた。

しかしこうした歓喜にもかかわらず、はやくも二人のあいだには激しい自我の葛藤がはじまる。この葛藤は先代のそれとちがって、個性のちがいからくる対立であり、たがいにゆずらず自我を主張して相手を征服しようとするがゆえに、先代のそれとは比べものにならぬ激しさで執拗にたたかわれる。そしてロレンスじしんとフリーダとの葛藤とおなじように、ここでも男の女への依存過度からくる屈辱感といらだちがみられ、最後は男の敗北

におわる。マリが『虹』をロレンスの“sexual failure”の物語だというのは、こうした関係に注目しているからである。まず争いは、アナが新婚の夢からさめて外の世界へ眼をむけはじめ、ティー・パーティを開こうとするのにたいするウイルの嫉妬からはじまる。無視されたと感じる彼の心は怒りにかたくとざされ、彼女は自分にまつわりつく彼のくらい意志を恐れにくむ。

とりわけ二人の対立の最も顕著な点は、その宗教にたいする態度のちがいである。すなわちウイルは教会の建築に関心をもち、宗教に絶対的・神秘的な意味、すなわち“a dark, nameless emotion, the emotion of all the great mysteries of passion”を求めようとする。いっぽうアナは、牧師の説くオーソドックスな教義に疑問を感じながら、教会に神秘的なものをもとめる彼の態度をきらい、反撥する。たとえば、彼は教会のステインド・グラスに描かれた小羊に宗教的意味をよみとろうとするが、彼女はただの玩具としか見ない。また彼はカナ(Cana)で、水がぶどう酒に変えられたという奇蹟を信じるが、彼女は信じない。すなわち前者が神秘的で、“darkness”で、“human soul”を信じるにたいし、後者は理性的・現実的で、“daytime”で、“human mind”を信じるのである。この対立がクライマックスに達するのは、二人がリンカン大伽藍をたずねるシーンにおいてである。

Then he pushed open the door, and the great, pillared gloom was before him, in which his soul shuddered and rose from her nest. His soul leapt, soared up into the great church. His body stood still, absorbed by the height. His soul leapt up into the gloom, into possession, it reeled, it swooned with a great escape, it quivered in the womb, in the hush and the gloom of fecundity, like seed of procreation in ecstasy.

She too was overcome with wonder and awe. She followed him in his progress. Here, the twilight was the

very essence of life, the coloured darkness was the embryo of all light, and the day. Here, the very first dawn was breaking, the very last sunset sinking, and the immemorial darkness, whereof life's day would blossom and fall away again, re-echoed peace and profound immemorial silence.

Away from time, always outside of time! Between east and west, between dawn and sunset, the church lay like a seed in silence, dark before germination, silenced after death. Containing birth and death, potential with all the noise and transition of life, the cathedral remained hushed, a great, involved seed, whereof the flower would be radiant life inconceivable, but whose beginning and whose end were the circle of silence. Spanned round with the rainbow, the jewelled gloom folded music upon silence, light upon darkness, fecundity upon death, as a seed folds leaf upon leaf and silence upon the root and the flower, hushing up the secret of all between its parts, the death out of which it fell, the life into which it has dropped, the immortality it involves, and the death it will embrace again.[11]

それから彼は扉を押しあけた。彼の前には大きな、柱列のたちならぶ幽暗があり、そのなかで彼の魂はふるえ、その巣のなかから飛びたった。彼の魂は大きな教会のなかへと飛びたち、舞いあがっていった。その高さにわれを忘れて、彼の肉体は静止していた。魂は幽暗のなかへ、放心へと飛んでいった。それはこのすばらしいいっさいからの離脱に気をうしなわんばかりよろめき、ちょうど恍惚のよろこびにある精子のように、子宮のなかで、豊饒の静寂と幽暗のうちにおののいていた。

彼女もまた驚きと畏れに圧倒された。彼女は彼のすすむあとにしたがった。ここでは、薄明は生の精髄そのものであり、色彩ある闇はすべての光、すべての昼の胚芽であった。ここには、この世のはじめの曙が明けつつあり、この世のおわりの夕日がしずみつつあった。そしてそこから生命の日が花ひらき、ふたたびしぼんでいく太古の闇が、平安とふかい太古の沈黙をこだましていた。

時をはなれ、永遠に時のそとに！　東と西とのあいだに、曙と日没とのあいだに、教会は沈黙の種子のように、発芽以前の闇のなかに、死後の沈黙のうちによこたわっていた。生と死を包含し、あらゆる生の騒音と変遷の可能性をひめて、大伽藍は大きな、種々の可能性をふくむ種子のように、しずまりかえっていた。そしてそこから想像もおよばぬ輝かしい生が花ひらくのであるが、そのはじめとおわりは沈黙の輪にほかならないのであった。虹のかけ橋をかけられて、この宝石をちりばめた幽暗は、沈黙には音楽を、闇には光を、死には豊饒をたたみかけていた。それはちょうど種子が葉には葉を、根と花には沈黙をたたみかけ、それが生まれでた母胎なる死、それが生まれおちた生、それが包含する不滅性、それがふたたび抱くであろう死、それらいっさいの秘密を、その部分のあいだに秘めているようであった。

ウイルは、この時間も生も死も超越し、あらゆる対立概念が統一される神秘にわれをわすれ、“the perfect, swooning consummation, the timeless ecstasy”に没入する。すなわちそこに、あらゆる対立を止揚統一する虹、すなわち未知なる世界を見ようとするのである。しかしアナはこの神秘な調和に惹かれながら、その息ぐるしい非現実性に反撥せざるをえない。そしてそこからもっと自由な世界へのがれるために、かたわらの人間の顔の彫刻に関心をよせる。その顔は教会のそとに現実の世界があることを語っており、ウイルの夢想はやぶられる。そして彼もアナの影響で、教会は絶対のものでなく“a world within a world, a sort of side show”にすぎず、その外に教会の包含しえない現実の世界があることに気づきはじめる。ここに我々は、未知なる世界への二つのアプローチの仕方をみることができる。ひとつは神秘な超現実の世界にそれをもとめるウイルの行きかたであり、もひとつは現実の世界にそれをもとめるアナの行きかたである。そして後者に軍配があがるのである。このことは、つぎの世代のアーシュラがはじめは父にならって神秘の世界を信じていたのが、しだいにその非現実性にあきたらなくなり、ついに宗教をも現実にてらして考え、現実の生活をいかに生きるかこそ大切な問題と考

えるにいたる経過にもあきらかである。けっきょく虹の探求は、観念的な神秘の世界にこもることにあるのではなく、あくまでも現実をいかに生き、どう打開していくかにこそあるべきなのである。

しかし、このようにウイルがアナに折れるまでには、じつにはげしい葛藤を経ねばならなかった。彼は自分の信じるところを彼女におしつけようとし、彼女はそれにはげしく反撥する。彼は妻の抵抗にいらだって、家長としての支配権を主張し、彼女を征服しようとするが、彼女は個人としての権利を主張してゆずらない。かくて、二人のあいだには「愛と葛藤の反覆」がつづく。やがて妻から姙娠を告げられたウイルは、彼女が出産というフィジカルな世界に充足を感じているのにたいし、自分は彼女から切りはなされたような孤独感になやまされる。彼はいわば子供のように妻に依存していて、女という方舟なくしては、人生という荒れくるう洪水を乗りきることができないのだ。この「おそろしい自分の限界の自覚」と、妻は自分にとって「すべて」であるのに自分は彼女にとって「無」であるという屈辱が、彼の妻にたいする異常なほどの自己主張となり、また異常なはげしさをもった愛の行為となって、彼女をおびえさせるのである。しかも、彼が女への依存と屈辱からのがれる途は死以外にない。この関係は、詩集『見よ、われらはやって来た!』(*Look! We Have Come Through!*, 1917) にうたわれる、ロレンスじしんとフリーダの夫婦関係とまったくおなじであって、彼が適切な男女関係の必要を痛感したのも、こうした自身のにがい体験に出たものにほかならない。

いっぽうアナは自分をおさえつけようとする夫のくらい意志をおそれながら、造物主のまえでは自分こそ勝利者だという誇りをいだいている。そして寝室でただひとり裸かになって、未知なる神のまえで歓喜の踊りをおどる。このように女の勝利をみせつけられ、ついには妻の寝室から閉めだされて眠れぬ夜をすごしたのち、ウイルは自分の敗北をみとめ、もはや異常な自己主張をやめる。けっきょく自分が妻にしたがわねばならぬことを認め、

彼女がもとめる physical love のみに満足して、妻と子（“matriarchy”）に奉仕して生きることにあまんずるのである。生まれた子供を胸にだいたアナは、「勝利者アナ」（“Anna Victrix”）と誇らしげにさけび、母たる歓びにかがやきながら育児に没頭する。こうしてはげしい葛藤はいちおう終りをつげ、二人のあいだには平和がおとずれる。しかしそれは男が女に屈服した結果であって、二人のあいだに完全な関係がうちたてられたことを意味するものではない。

その不調和のあらわれとして、前の世代同様ウイルと長女アーシュラとのあいだに「奇妙なむすびつき」がうまれる。すなわち、父は娘に充たされぬものの充足をもとめ、娘は父の不満や歓びに敏感になる。これはロレンスじしんとその母の関係とおなじで、彼がその害悪をしばしば強調したところである。ウイルは、アーシュラがしだいに自我にめざめ、親から独立していこうとするのに焦だち、彼女を背負って高い位置から水路の水にとびこんだり、空中ブランコで彼女が気分を悪くするほど高くまで上ったり、異常な加虐的ふるまいをする。また妻への従属への反撥から、すべてに無頓着で快楽的になり、劇場で隣りあわせた娘と火あそびをし、妻との関係も肉欲の満足のみにふける、愛の行為というよりは「闘争」と化していく。その結果、内的生活において妻の支配から自由になると同時に外的生活でも意欲的になり、学校教育における手工の重要性を感じて、夜間の木工教室を設けて教鞭をとりはじめるということにされているが、この結末も前の世代のばあい同様きわめて不自然で、彼らの夫婦関係が「充足」に達したとは考えられない。たとえこうした方向が、自我の独立という点では一歩前進であるとしても、それはしょせん完全な調和ではなく、けっきょく彼らは精神面の不調和を未解決のまま、未知なる世界の探求を途中で放棄して、肉体的結合による満足に妥協してしまったのである。すなわちウイルは妻子と家庭以外に別の世界があることを知りながら、自分の限界を意識するあまりその探求をあきらめ、妻子に奉

仕する生活と、その不満の吐けぐちとしての肉欲の追求に甘んじたのである。一方アナも、なお充たされぬものをもとめてかなたの虹を望みながら、それを追求していこうとはせず、つぎつぎと九人の子を生みそだてるフィジカルなよろこびに満足してしまう。いわば彼らは戸口であって、虹の徹底的探求は、彼らから生まれるつぎの世代に待たねばならなかったのである。第六章「勝利者アナ」（‘Anna Victrix’）の最後は、つぎのような象徴的な文章でむすばれている。

As soon again she was with child. Which made her satisfied and took away her discontent. She forgot that she had watched the sun climb up and pass his way, a magnificent traveller surging forward. She forgot that the moon had looked through a window of the high, dark night, and nodded like a magic recognition, signalled to her to follow. Sun and moon travelled on, and left her, passed her by, a rich woman enjoying her riches. She should go also. But she could not go, when they called, because she must stay at home now. With satisfaction she relinquished the adventure to the unknown. She was bearing her children.

There was another child coming, and Anna lapsed into vague content. If she were not the wayfarer to the unknown, if she were arrived now, settled in her builded house, a rich woman, still her doors opened under the arch of the rainbow, her threshold reflected the passing of the sun and moon, the great travellers, her house was full of the echo of journeying.

She was a door and a threshold, she herself. Through her another soul was coming, to stand upon her as upon the threshold, looking out, shading its eyes for the direction to take.[19]

そして間もなく彼女はふたたび姙娠した。そのことに満足して不満は消えてしまった。彼女は、ひた走りに前進をつづ

ける偉大な旅人である太陽がのぼり、道を急いでいくのをかつて見つめたことを忘れてしまった。彼女は、月が高くくらい夜の窓ごしにのぞきこみ、まるで魔法の国からの挨拶のようにうなずき、ついて来るようにと合図したことを忘れてしまった。太陽も月もどんどんと旅をつづけて、側を過ぎさっていって、彼女はおおくの富を楽しんでいる豊かな女として置きさられた。彼女もまた行くべきであった。しかし彼らが声をかけてくれたにもかかわらず彼女は行けなかった。いまや彼女は家庭にとどまらねばならなかったからである。満足して彼女は未知なる世界への探求を放棄した。彼女はどんどん子供を生まねばならなかった。

つぎの子が生まれようとしていた。そしてアナは漠然とした満足にひたっていった。たとえ彼女が未知なる世界への旅人ではなく、いまや豊かな女として行くべきところに行きついて、出来あがった家におちついてしまっても、なお彼女の家の戸は虹のかけ橋のもとに開かれていて、その敷居は偉大な旅人である過ぎゆく太陽と月の影をうつしており、その家のなかは旅の余韻にみちみちていた。

彼女じしんは戸口であり敷居であった。彼女をとおして別な人間があらわれ、敷居のうえに立つように彼女のうえに立ち、はるかに小手をかざして行くべき道をのぞむようになるはずであった。

このように、第二の世代もついに未知なる世界を探りあてるにはおよばなかったけれど、その探求の意識が前の世代よりはるかに明確になり、探求の輪がいちだんとひろがったことは明らかである。もはや未知なる世界の存在は明確に意識され、それを探求しようとする意欲があたりにみちみちている。あとは決然として踏みだすのみである。

さていよいよ第三の世代にうつるのであるが、その前に第九章「マーシュ農場と洪水」（‘The Marsh and the Flood’）という一章があって、ある大雨の夜酒に酔ったトムがノッティンガムから馬車で家へ帰りついたのち、屋敷をあらう洪水に足をとられ、溺死するという事件がえがかれる。この創世紀をおもわせるエピソードは

ムーア氏のいうように[13]、ブランググェン家の古い世代の終滅と、新しい世代への移行を象徴するものといえるだろう。以後第一の世代はまったく姿を消し、第二の世代もときどき脇役的に顔をだすだけで、舞台は完全に第三の世代アーシュラにうつるのである。なお、この作品にほかにも聖書や教会などキリスト教に関するイメジのおおいことは、注目すべき点である。

さてこのアーシュラの世界には、本小説の頁数のおよそ半分が割かれており、それからも作者がこの部分においた重要性がうかがわれる。この世代においては、前の二世代におけるより未知なる世界への意識が格段に明確となり、その探求の輪が一段と複雑化し、拡大していることはもちろんであるが、特に二つの点において顕著に異なっている。一つは、前の二世代においては主として男女の人間関係が中心となり、舞台もマーシュ農場を中心とする古い中部イングランドの社会にかぎられていたにたいし、第三の世代では、しだいに機械文明化されつつある二十世紀初頭の英国ひいては世界の社会状勢が大きな場をしめ、アーシュラとアントン・スクレベンスキ（Anton Skrebensky）との人間関係も、そうした複雑な対社会関係ときりはなして考えることができない点である。現代では社会こそあらゆる人間関係を左右する要素であって、社会ときりはなして二人だけの男女関係というものは考えられないのである。アーシュラの祖父母や父母は、家庭内で夫婦の関係の調和のみを考えておればよかった。しかし彼女は成長するにつれて、前の世代の体験しなかったさまざまな社会問題といやおうなく対決し、幻滅し、悩み、矛盾や虚偽を否定して闘っていかねばならなかった。彼女の虹の探求は、そうした社会状勢のなかでなされねばならなかった。当然の結果として、ここでは男女の人間関係よりもむしろアーシュラの社会への批判・洞察が前面に押しだされている感じで、リーヴィス教授のいう「現代文明研究[14]」的色彩がきわめて濃くなっている。これは前の二世代のばあいと大きく異なる点で、先に触れたムーア氏のような意見が出ること

もわからぬではない。しかし、これはあくまで社会状勢の変化として解釈すべきで、小説の主題が変ったことを意味するものではない。この傾向はつぎの『恋する女たち』へ発展する方向を示すもので、第一次世界大戦が作者にあたえた影響をみとめぬわけにはいかない。私はこの作品に影響をおよぼした二要素として、前半における作者じしんの夫婦生活の葛藤と、後半における第一次大戦の影響とをあげたい。第二の相異点は、前の二世代では男女が完全な関係を見出しえぬままに妥協したのにたいし、アーシュラはついにはアントンを振りすてて、なお虹をもとめて前進する態度を示す点である。新しい複雑化された社会に生まれた彼女は、祖父母や父母の知らなかった幾多の困難な現実を体験せねばならなかった。戦争、機械文明、教職、大学での勉学など、いずれもそれは彼女にとって「幻滅の遍歴」(“a pilgrim's progress of disillusionment”)[15]であった。しかも彼女はたえず前方に虹をのぞみ、自己の信ずる判断の規準にしたがって、妥協せず譲歩せず、ひとつひとつ幻滅の現実を乗りこえて、ひたすらに自己の道を歩みつづける。そして最後には、祖父母や父母の断ちえなかった結婚という社会的絆をふりきって、さらに未知なる世界めざして進もうとするのである。すなわち彼女はスピルカ氏のいうとおり、前の二世代の前進をさまたげた「人生における展望と意図の欠如、未知なるものへの恐怖、キリスト教への逃避、そして最後に、ふつうの母性という『はげしい陶酔』への堕落」[16]をみごと克服したのであり、その意味で、彼女の達した世界は、祖父母や父母のそれより格段に高次元のものといえる。つまり虹の探求は、彼女がさきの世代の世界を大きく超えることによって、ようやく本格的な軌道にのったわけで、これまた『恋する女たち』への発展を示すものである。

さてアーシュラの社会との対決は、彼女が中学校に入るとともに、家庭にたいする反撥と、キリスト教にたいする疑問となってはじまる。彼女は両親と多数の弟妹の住む家庭のフィジカルな世界に反撥して、外の世界に眼

をむけはじめ、学校をはじめとする社会や宗教の問題についてふかく考えるようになる。ことに彼女を苦しめたのは、キリスト教の神秘を信じる“Sunday world”と、現実生活の場である“weekday world”の混乱であった。最初彼女は父の影響でキリスト教の神秘を信じ、宗教の生活と現実生活との二重性のうちに生きてきたが、成長するにつれて教義に疑問をいだき、神秘の世界の非現実性にあきたらなくなり、現実生活をいかに生きるかこそ大切だと考えるようになる。この傾向はのちにいくほど強まって、ついには教会の教義をまったく否定し、あらゆる宗教の根本は人間の魂の奥底にある渇望（“a human aspiration”）にあり、自分の信じる神はキリスト教の説くような「謙譲的」な“Lamb”や“Dove”ではなく、もっと激しい“Lion”であり、“Eagle”であると信じるにいたるのである。ところで、彼女がはじめてアントン・スクレベンスキ青年に会ったのは、彼女が十六歳になろうとして、この宗教の世界と現実の世界の混乱に悩みくるしんでいる時であった。前の二世代のばあい同様、二人はたちまち互いに惹かれる。そして揃ってダービ（Derby）の教会へ行ったり、納屋のなかで抱きあったり、祖父母や父母のやったと同じことがくりかえされる。しかし彼らの見た教会はもはや前の世代が見た神秘なそれではなく、修理工事中で混乱をきわめており、彼らの生きていく世界の混沌と、宗教の無力さを象徴するかにみえる。彼らがウイルのように教会の神秘に虹の調和をもとめ、宗教に救いをもとめることはもはや絶望で、彼らは手をたずさえて、教会をのりこえて現実を生きねばならないのである。

にもかかわらず彼女の「幻滅の遍歴」は、二人の衝突となって早くもはじまる。それはアーシュラの叔父（アナの義弟）フレッド（Fred）の結婚式でのことである。夜の祝宴までのあいだ、二人はつれだって水路ぞいに散歩をする。左手は炭坑や街の雑沓をへてロンドンに通じ、右手はうつくしい大自然につながり、歩む二人のあいだには大空がひろがって、彼らのすすむ方向のへだたりを象徴するかのようである。アーシュラが「あなた軍人が

お好き?」とたずねたことから、二人のあいだに戦争という問題をめぐって論争がはじまる。自分は国家の一員だから国家のために義務をつくさねばならぬと、軍人としての常識論をいうアントンにたいし、アーシュラは個人以外に国家の存在をみとめず、したがって戦争の意義をみとめない。やりとりのうちにしだいに互いの考えのちがいが明らかとなり、最後はつぎのような彼女の言葉でおわる。「あなたは一個の自我をもった人間ではないように思えますわ。あなたのいらっしゃる所には自我をもった人間がいないみたい。あなたはほんとに一個の自我をもった人間なの? あなたは自我のない腑ぬけのようにみえるわ。」("It seems to me as if you weren't anybody—as if there weren't anybody there, where you are. Are you anybody, really? You seem like nothing to me.") 明らかにこの対立は、単なる個人的な過去や性格のちがいではなく、戦争という重要な社会現象にたいする現代人としての態度の相異なのである。同時にそれは、現代人の生きかたそのものを規定する根本的な対立なのである。このことは、前の二世代における対立と大きく異なる点である。このあとアーシュラは、水路の波止場にもやってある小舟で、貧しいが生命のよろこびにみちて暮している舟のり夫婦を見、その赤ん坊に首かざりをあたえる。このシーンは、赤ん坊をはさんでその父親とアーシュラのあいだに、あたたかいロレンス的共感がただよい、すぐ前の二人の苦い論争と効果的対照をなし、その対立を浮彫りしている。彼女はそこを去りながら、アントンとの論争で「この世が灰燼に帰したような空しさ」を感じていたのに、この舟のりによって「楽しい心あたたまる感情」をあたえられ、「自分の生命のゆたかさ」を取りもどしたように感じる。一方アントンは、女を肉体的にしかもとめえない自分にくらべ、この舟のりが霊肉両面で女を愛していることに羨望をおぼえるのである。

この二人の対立の象徴は、つぎの結婚祝賀の野外ダンス・パーティのシーンで最高頂に達する。物みながほのぐらくみえる星あかりのなかで、アーシュラは「自由になろうと鎖をひっぱる猟犬のように」、この現実生活を

こえてかがやく星の世界へ、未知なる世界へ飛んでいきたい狂おしいほどの衝動に駆られる。やがてのぼった月光のもとで、アントンに抱かれて踊りながら、彼女の魂はすでに月の世界へ飛んでいる。彼女は「ふるえるアネモネのように」身体をひらいて月光を受けいれ、月との“communion”“consummation”に陶酔しているのである。彼女を抱いているアントンや他の人間は、彼女の衝動をおさえる「重石」にほかならない。アントンはそうした彼女をおさえよう、自分に従わせようとして接吻するが、かえって「月光が闇を駄目にしてしまう」ように、自分をさまたげる彼を「ひき裂いて無にしてしまう」意思をもった、彼女の「月のようにひややかで、猛烈にからい塩のように燃えるような」接吻の反撃に、あえなく破れさる（“consumed, annihilated”）。彼はこの時、自我をもった男としての「芯」（“core”）を焼きつくされたのである。このいかにもロレンス的抒情性と官能性をもって描きだされる象徴的エピソードは、二人の肉体的不調和ではなく、精神的対立をしめすものである。すなわち、アントンが現実の人間社会を肯定し、それに安住している常識人であるのにたいし、アーシュラは本能的にその醜悪を感じてそれを否定し、そこからはるかはなれた未知なる世界を究めようとする探求者であるのである。これは単なる性格の相異ではなく、両者の生きる世界のちがいを示す、実存の根本的対立である。そしていま自我の対決において、アントンは完全に破れさったのである。すなわち彼は、アーシュラがもとめる虹探求の道づれとして、完全に失格したのである。今後二人の交渉はつづくが、最後に彼女が彼を棄てるのは、この時すでに運命づけられているのである。なお、この作品では月光のシーンがしばしば象徴的に用いられ、特にアーシュラのばあいその結びつきは密接である。月は彼女にとって、この現実世界をはるかに超えた未知なる理想世界を象徴するようである。

折りしもこのころボーア（Boer）戦争がはじまり、アントンも南アフリカへむかうと聞いて、アーシュラは

「この宇宙の両極がくだけて、物みなが底なしの穴へころげこむような」恐怖を感じる。彼女はこの世の巨大な力が、個人の存在などは塵芥のように、どこへとも知れずめちゃくちゃにおし流していくのを感じ、それに断乎抵抗しようと考える。戦争においては「最大多数の利益」のみが問題であって、個人は「国家・現代人という大きな社会構造のなかの一枚の煉瓦」にすぎない。戦争にあっては真の個性は死んでいるのである。しかも彼女からみれば、現在の社会の最高の幸福は、もはや「一一般人」(“the average individual”)の最高の幸福ですらなく、それはただ物質的繁栄を意味するにすぎない。しかるに、アントンはこうした事態にふかい疑問をもたず、ただ全体の幸福のために、軍人としての義務をつくせばよいとのみ考えている。彼のこうした態度に心をくらくしつつ、彼女は戦地へ出発する彼を見おくる。去りゆく汽車を見おくりながら、彼女の心はひえびえとした空虚を感じるにたいし、彼のほうは、彼女からはなれることにむしろ安堵を感じている。かくて二人の関係は、戦争によって六年あまり中断される。ここにはアーシュラの見かたをとおして、現代の物質文明の醜悪さと、そのひとつのあらわれとしての戦争の没人間性にたいする、作者じしんの透徹した洞察と、はげしい批判がみられる。

こうしてまず恋人に幻滅し、戦争の衝撃をうけたアーシュラは、さらにつぎの幻滅を経験することになる。それは、彼女と高等学校での先生ウィニフレッド・インガ(Miss Winifred Inger)とのあいだに、同性愛的な関係が生じたことにはじまる。彼女はインガ先生のうつくしい容姿に憧れると同時に、彼女との議論をつうじて、宗教や哲学の問題についてあたらしい眼をひらかれていく。しかしやがて彼女は、インガ先生に自分の意にみたぬものを感じはじめ、彼女から去ろうとする。そのかわり彼女は、インガを叔父のトム(Tom Junior)と結婚させることを思いつき、彼が炭坑を経営しているヨークシャのウィギストン(Wiggiston)という炭坑町の、彼の家で二人をひきあわせる。アーシュラは、機械文明の醜悪さを露呈しているウィギストンの混沌ぶりに眉をひ

そめる。

The place had the strange desolation of a ruin. Colliers hanging about in gangs and groups, or passing along the asphalt pavements heavily to work, seemed not like living people, but like spectres. The rigidity of the blank streets, the homogeneous amorphous sterility of the whole suggested death rather than life. There was no meeting place, no centre, no artery, no organic formation. There it lay, like the new foundations of a red-brick confusion rapidly spreading, like a skin-disease.[17]

その場所には奇妙な廃墟の荒涼さがあった。群や塊りをなしてぶらついているか、アスファルト舗道をとおってもの憂げに仕事にいく坑夫たちは、生きた人間とはみえず、亡霊のようであった。がらんとした街路の厳しさ、なにもかもが一様に雑然とした空虚さは、生よりもむしろ死を想わせた。集会所もなければ中心もなく、動脈もなければ有機的組織もなかった。そこにその町は、皮膚病のように、急速にひろまる雑然たる赤煉瓦のあたらしい土台のようによこたわっていた。

トムは、自分の使っている女中で、炭坑のわるい環境のため、父と二人の兄弟ばかりか夫まで結核でうしなった女の話をし、ここでは炭坑こそすべての“raison d'être”で、坑夫は賃銀のために売られた機械であり、結婚や家庭といった人間生活は、「ささいなおそえもの」(“a little side-show”)にすぎないと語る。すなわちここでは、「人間の肉体と生命とが、炭坑というあの整然とした怪物に隷従している」のである。アーシュラは、この人間を機械の奴隷と化する物質文明の、おそるべき醜悪さを憎悪すると同時に、出来るものなら機械を叩きつぶしてやりたい、炭坑を破壊してやりたいという激しい怒りにもえる。そして機械文明を批判しながら、けっきょくそれに奉仕することに甘んじている叔父と、彼に共感を感じているインガに、ものが腐りはてたような不快な

沈滞を感じて反撥する。トムとインガはその後接近して、やがて結婚するが、アーシュラの心はこの二人から完全にはなれてしまう。すべてのことに飽いて中年に達したトムは、結婚になんの情熱もなく、ただ子孫をのこすために結婚したのであり、インガまたなんの抵抗も感じず、この安易な自己欺瞞の生活に応じたのであった。教養ある知識人として、アーシュラがこれまで憧憬にちかい眼でながめてきたこの二人が、いまやまったく尊敬にあたいせぬ、物質文明に奉仕する人間であると見きわめたことは、この第十二章が「恥辱」（‘Shame’）と題されていることからもわかるように、彼女にとってきわめてショッキングな幻滅であっただろう。彼女はこの経験以後、「若々しく愛情にみちた自己」は死滅し、もう人を愛することはできまいと思うほど冷えびえとした絶望にしずむのである。

やがて高等学校を終えたアーシュラは、両親の住む physical love の世界にあきたらず、さらに広い「男の世界」（‘The Man’s World’）で自己の可能性をためすべく、小学校の臨時教員の職に応募し、イルケストン（Ilkeston）の聖フィリップ校（St. Philip’s School）という学校に就職する。最初彼女は生徒との人格的接触を夢み、教育の情熱にもえて出勤する。しかし間もなく、生徒は人格ではなく「非人間的存在の集合」であって、彼らとの人格的接触などはのぞみえず、力による支配のみがものをいうことを知らされる。生徒を教えるには自分の人格などは棄て、大声で機械的にどなりつづける「機械」「道具」にならねばならぬことを知らされる。すなわち、自由をもとめて跳びこんだはずの学校という世界が、じつは人間性を閉じこめる「牢獄」であることを、いやおうなく知らされるのである。彼女をつめたい非難の眼でみる校長と、彼女に反抗し、石をなげつける生徒たち。こうしたなかで、彼女もついに生徒との人格的接触をあきらめ、力で屈服せしめようと闘いを開始する。しかし腕白小僧を鞭うちながら、彼女は、自分の「鋭敏な感性」が焼きつくされるような苦痛を感じずにはおれ

ない。こうして二年間の幻滅の生活をすごしたのち、彼女は学校を辞職し、さらに高度の勉強をすべくノッティンガム大学に入学する。またこの頃彼女は、ベルコート・ホール（Belcote Hall）にある同僚マギ・スコフィールド（Maggie Schofield）の家に招かれ、農園を経営している長男のアントニ（Anthony）から結婚の希望をほのめかされるが、好意をいだきつつ断る。彼が感覚の世界にのみ生きている人間であるにたいし、彼女は未知なる世界をもとめて果てしなく歩みつづける旅人であって、人生をともにすることができぬことを知っていたからである。

さてノッティンガム大学に入ったアーシュラは、最初はその学問の源である中世の僧院を想わせるしずかな学問的雰囲気を愛し、教授を「黒いガウンをまとった知識の僧侶」とみなし、勉強の意欲にもえて一年間をすごす。しかし二年目になって、彼女の大学によせた夢はさめ、学問への情熱も薄らぎはじめる。それは、学問の府まで物質文明のおそるべき魔手に侵されていることを見ぬいたからである。大学はもはや真理探求の場ではなく、「金もうけのためのより高度の準備をする小さな徒弟養成所」であり、「工場用の小さなうすぎたない実験室」でしかない。学問すら物質的成功へのひとつの手段にすぎないのである。いまや彼女は、あらゆる事物の下にひそんでいる、物質文明という「永久になくならない醜悪な下部組織」を意識せずにはいられないのである。彼女の大学にたいする幻滅は、つぎのエピソードにみごとに示されている。ある日彼女は実験室で、顕微鏡をもちいて単細胞生物を観察しながら、物理学のフランクストン教授（Dr. Frankstone）とかわした会話を焦だちとともに想いおこす。教授は言った。なぜ生命だけを特別に神秘なものと考える必要があるのか。生命も、すでに解明されている科学的諸現象とおなじく、複雑な物理的・化学的作用から成っているといえない理由はない、と。アーシュラは、スライドのうえをうごめく小さな生命の動きをみながら反問する。では我々生物にも、電気や光や

熱とおなじように、「魂」すなわち生きる「意志」がないというのか。我々はただ機械のように動いているだけなのか。かりに生命が物理的・化学的作用から成りたっているとしても、それらが結びついて、この動いている小さな生物を構成しているその目的は何なのか、と。生命の目的はただ機械のように動くことでもなければ、「単なる自己保存や自己主張」でもない。それは、おのおのがそれ自身になりきること、それ自身の存在を確立することである。すなわち“a consummation, a being infinite”になること、いいかえれば未知なる世界を探りあてることである。この生命の神秘を認識しないかぎり、人間の生活も機械の動きと異なるところがあろうか。人間がともすれば機械の奴隷と化しつつある現代において、ロレンスがこの生命の神秘と尊厳を叫んでやまなかったことは、高く評価されねばならない。

ところでアーシュラは、その未知なる世界を彼方にかすかに望みながら、まだその在り場をつきとめることができなかった。大学一年目のおわり、家族でスカーブラ（Scarborough）の海岸へ行ったとき、彼女は感涙に胸のあつくなるを覚えながら、かがやく海に眼をやる。

> Out of the far, far space there drifted slowly in to her a passionate, unborn yearning. “There are so many dawns that have not yet risen.” It seemed as if, from over the edge of the sea, all the unrisen dawns were appealing to her, all her unborn soul was crying for the unrisen dawns.[18]
>
> はるかはるか彼方から、まだ生まれぬはげしい渇望が彼女のほうへゆっくりと流れてきた。「まだ明けきらぬ多くの曙が待っている。」水平線のかなたから、すべてのまだ明けぬ曙が彼女に呼びかけ、彼女のまだ生まれぬ魂が、全身でまだ明けぬ曙をもとめて叫んでいるかのようであった。

しかもこれまで見てきたように、彼女の探求は幻滅また幻滅の遍歴であった。

Always the shining doorway ahead; and then, upon approach, always the shining doorway was a gate into another ugly yard, dirty and active and dead. Always the crest of the hill gleaming ahead under heaven: and then, from the top of the hill only another sordid valley full of amorphous, squalid activity.[109]

かがやく戸口がつねに前方にみえていた。しかもいざ近づいてみると、いつもそのかがやく戸口は、うす汚い活潑で死んだ別のみにくい庭へ通ずる門であった。つねに前方の空のしたに、かがやく岡の頂きがみえながら、その岡の頂きに達してみると、また別な雑然とうすぎたない活動にみちた、うす汚れた谷間がみえるだけであった。

しかし彼女はくじけなかった。彼女はこれまで経てきた自分の道程をかえりみ、自分が少しずつでも変ってきていることを認め、今後もあくまで虚偽や醜悪と闘っていこうと決心する。まだしかとつきとめてはいないけれど、彼女には闇のなかに「野獣の眼のようにかがやき、貫き、消えていく光の点」が見えるのだ。そして汽車がはしり、工場の機械がうごいている、この日常の世界にのみ生きている人間が、たえず光のなかにいるので闇があることに気づかぬ、蛾や子供のように愚かに思われるのであった。

彼女が二十二歳の時、アントンが一時休暇を得て六年ぶりに帰国する。再会した二人のあいだに愛情のつながりは残っていたけれど、彼らはもはや互いに別世界の人間で、「休戦で相会した敵同志」であった。二人はついに肉体的にむすばれ、アーシュラは無意識の闇の世界で、永遠なるものを得たような歓喜をあじわう。しかし結婚しようというアントンに、彼女はしたくないと答える。彼女にとって大切なのは、二人だけでもつこのすばらしい体験であって、「社会上の妻」(“social wife”)になることではないからである。いいかえれば、彼女は軍

人という社会的地位をもった、アントンという男性を愛したのではなく、ひとりの男性の肉体を通じて、性の神秘のなかに未知なる世界を探ろうとしているに外ならないからである。こうして二人は周囲の社会を無視するように、ロンドンやパリで、欲望のままに歓喜にみちた休暇をたのしむ。しかしパリからの帰途ルーアン（Rouen）へ立寄った時、アントンは、アーシュラの求めているものが自分ではないことをはっきりと見せられる。かくて灰色の死の世界にいるような虚脱感になやむ彼は、彼女を自分につなぎとめるため、結婚していっしょにつぎの任地のインドへ行ってくれるよう、彼女にくりかえし歎願する。これにこたえてアーシュラは、万事が金銭に支配されている現代の政治・社会機構をはげしく攻撃し、アントンがインドへ赴任するのも、原住民の無知に乗じて支配する植民地政策の一翼をになうものときめつけ、自分は彼をはじめ「すべての古い死んだもの」に反対だといいきる。アントンは彼女を恐れるようになり、彼女は彼が軍人という「日常的自我」をすて、ひとりの「裸かの原始の人間」にかえった時のみ真に彼を愛した。

アーシュラの卒業試験をひかえた聖霊降臨節に、二人はサセックスの丘陵の麓にある小屋へいく。丘陵の頂上から、汽車が野をこえ山をくぐって、白煙をあげながらいずこともなくひた走りに走っていくさまを見て、彼女は涙にむせぶ。これは大自然の悠久な偉大さにくらべ、人間の営みのあまりにも小さいことを象徴するものといえよう。彼女は屋内での愛の行為をきらい、丘陵のうえで夜をすごすようになる。満天に星のかがやく暗いなめらかな丘陵を、彼女は全裸となり、彼にも服をぬがせ、そよ風に髪をなびかせながら喜々として駆ける。彼女は彼とでなく、星と交わっているかのようである。そして機械文明に汚されない日の出のうつくしさに感泣する。アントンは完全に置きさられ、彼女の異常なふるまいにただあきれるだけである。彼の腕に抱かれながら、彼女の心は現実の世界をこえて、新しい自由な世界をさまようているのであって、離さないでくれと泣いて訴える彼

は、もはや「夢魔」としか感じられない。彼女は彼にたいして、ほかの誰にたいするより強い愛情をいだきながら、彼によっては未知なる世界を探りあてることができないことを知っているのだ。大学での学友ドロシイ(Dorothy)との愛の問題をめぐる対話にも明らかなように、彼女の求めているのは愛を超越したなにかであって、それは到底彼によっては充たされえぬものなのである。すなわち、彼の失格は「性を超越したところ」にあったのである。しかし、彼女は卒業試験に落第した結果、結婚してインドへいくべきか否か、最後的決断をせまられる。折りしも二人はアントンの大叔母から、リンカンシャの海岸でもよおされたパーティに招かれる。そしてやはり月光のうつくしい夜、海岸で彼女は憑かれたように彼をもとめ、彼はその異常な激しさに圧倒されて気をうしなわんばかりになる。そしてこれを最後に、彼女は翌朝荷物をまとめ、ひとり帰っていく。見送るアントンはほっとして、平凡な安偖を感じる。そして間もなく上官の娘と結婚して、いっしょにインドへ旅だつ。こうして二人の関係はおわる。

アントンの出発後アーシュラは姙娠の徴候を感じて、さすがに心の迷いをおぼえ、女である以上自分も母のように、平凡な妻として母として生きるのが穏当と思いなおし、折れて彼に許しをもとめる手紙を書く。そのあと彼女は雨のなかを、ちかくの森のなかをさまようて、びしょぬれになって家に帰りつき、高熱を発して昏睡のまま二週間をすごす。この象徴的なエピソードは、子供という束縛によって、彼女をアントンをはじめとする古い世界へひきもどそうとする力と、それを振りきろうとする彼女の意識との、最後の葛藤をしめすものにほかならない。またこのシーンで、彼女が家へ帰ろうとする道をふさぎ、彼女をおびやかす馬群のイメジは、自分を古い世界へ閉じこめようとする力にたいする、彼女の無意識的恐怖を象徴するものと思われ、ムーア氏はこれを「フロイド的[20]」と呼んでいる。しかしやがて昏睡から覚めた彼女は、あの殻から出て自由の身となり、古い冬をすて

て新しい芽をふき出そうとするどん栗のように、アントンも両親も大学も友だちも、すべての古い世界をすてて、新しい真実の世界に生まれかわった自分を発見する。すなわち彼女は昏睡状態での葛藤の結果、古い世界への絆を最終的に断ちきったのである。そして、窓からみえる街並は依然として雑然たる廃墟のようであり、そこを歩いている人間は棺桶に入った生ける死骸同然であるが、その古い世界の殻のしたにも、新しい世界を生む芽がひそんでいることを感じる。彼女は大空にかかった虹に、その新しい世界への希望をみるのである。この小説はつぎのような一節でむすばれている。

And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven.

そして虹が地上に立っていた。彼女は、かたい殻に包まれ、ばらばらにこの腐敗した世界のうえをはらばっているうす汚れた人々もまだ生きており、彼らの血のなかには虹がかかっていて、いずれ彼らの魂のなかで生命を得、その結果彼らは崩壊のかたい殻をぬぎすてて、あたらしい汚れのない裸かの肉体が、あたらしい生命に生まれでて、あたらしく成長し、光と風と天のきよらかな雨へと頭をもたげていくだろうことを知っていた。彼女は虹にこの大地のあたらしい建築を見た。古いもろい腐った家や工場は一掃され、世界が空にひろがるあの天にふさわしく、真実という生きた建物としてうちたてられるのを見た。

こうして『虹』はアーシュラが前方に虹をのぞみ、人類の未来にたいする希望が示されたところで終る。これまでの彼女の歩みはまさしく「幻滅の遍歴」であった。彼女はつぎつぎ現代社会の矛盾や醜悪と対決し、それを否定していかねばならなかった。なぜなら彼女のめざす未知なる世界は、それを否定する方向にあったからである。ところで、彼女がそうした現代社会の矛盾や醜悪を改善する、積極的努力において欠けるところがあったと批判されるかもしれない。たしかに彼女の態度は、建設的というよりは否定的であった。しかしこのことは、社会の機構があまりにも大きく、一個人の働きかけなどでは歯がたたぬ現実をかえりみる時、やむをえなかったのではないかと思われる。彼女にとっては、一般大衆の眼にみえぬ社会の矛盾や醜悪を見ぬき、それを批判し否定することが、精一杯の抵抗であったであろう。彼女にとって、この現実社会に未知なる世界を望むことは絶望であったからである。かくて、彼女の歩みはひたすらに現実否定の方向を走りつづけ、ついには現実社会をこえた世界に虹を探ろうとするのである。ここに我々は、人類の未来によせる彼女の切なる希望をみることができる。

未知なる世界をもとめてひたすら進んできた三世代の歩みもついにここまで達した。しかし、めざす世界はまだ究められたわけではない。世代ごとに探求の輪はひろがって、その入口をのぞむところまで辿りついたが、それがいかなる世界に通じるかは、つぎに解決されねばならぬ課題である。『虹』はその意味で未完の作品といってよく、その終りはリーヴィス教授のいうとおり“an end”ではなく、つぎの『恋する女たち』へつづく“a cessation”[22]であるといえる。『虹』の問題は、『恋する女たち』においてさらに徹底して追求されるのである。

最後に作品からの引用文を訳すにあたって、中野好夫氏訳（新潮社版）を参照させていただいたことを附記しておく。

（一九六五年一月）

〔註〕

(1) Aldous Huxley (ed.) : *The Letters of D. H. Lawrence*, p. 198.

(2) H. T. Moore : "*The Rainbow*" (Frederick J. Hoffman & H. T. Moore (ed.) : *The Achievement of D. H. Lawrence*, p. 156.)

(3) D. H. Lawrence : *The Rainbow* (The Phoenix Edition, Heinemann), p. 2.

(4) F. R. Leavis : *D. H. Lawrence ; Novelist*, p. 101.

(5) *Ibid.*, p. 103.

(6) *The Letters of D. H. Lawrence*, p. 118.

(7) *Ibid.*, p. 196.

(8) J. M. Murry : *D. H. Lawrence ; Son of Woman*, pp. 75–91.

(9) F. R. Leavis : *D. H. Lawrence ; Novelist*, p. 123.

(10) *The Rainbow*, p. 141.

(11) *Ibid.*, pp. 198–99.

(12) *Ibid.*, p. 193.

(13) H. T. Moore : *The Life and Works of D. H. Lawrence*, p. 144.

(14) F. R. Leavis : *D. H. Lawrence ; Novelist*, p. 101.

(15) Anthony Beal : *D. H. Lawrence*, p. 38.

(16) Mark Spilka : *The Love Ethic of D. H. Lawrence*, p. 107.

(17) *The Rainbow*, p. 344.

(18) *Ibid.*, p. 433.

(19) *Ibid.*, p. 436.

(20) H. T. Moore : *The Life and Works of D. H. Lawrence*, p. 142.

(21) *The Rainbow*, p. 495.

(22) F. R. Leavis : *D. H. Lawrence ; Novelist*, p. 97.